遠征レポート’2000
WOC2001 トレキャンプ、IOF 総会

村越 真

今回は、ワールドカップ、来年世界選手権のトレーニングキャンプ、そしてオーストリアでの国際連盟（ＩＯＦ）総会に参加した。ワールドカップについては、山本君の報告記事があるので、その他のレースについて軽く報告した後、今回の遠征のメイン・イベントであった IOF 総会での世界選手権開催国の決定についてレポートする。

ＷＯＣ２００１トレーニングキャンプ

来年フィンランドで開かれる世界選手権に先だって、今年の 7 月中旬に公式トレーニングキャンプが行われた。公式といっても、ほとんどの強国はウクライナとフィンランドのワールドカップの合間なので来ていなかった。また、特に全体として何かあるというのではなく、それぞれコントロールを設置してあるテレインを使って自由に練習するだけだ。大国の多くは８月にトレーニングキャンプを行うらしい。

世界選手権に先立つトレーニングキャンプは、世界選手権のテレインになれ、そこでのナヴィゲーションを模索する上で非常に重要な機会である。日本チームでも毎回チームの主力やマネージャーを送って、情報収集に努めている。今年は先発体が７月８日から、後発隊が13日よりトレーニングキャンプ開催地であるタンペレに入った。

テレインのタイプは３種類

用意されているテレインは 9 つであり、そのほとんどが世界選手権のレベルで作成されていた。基本的にはいずれもアボガリオ（丘の上の岩盤の部分ではほとんど木が生えておらず、一見オープンのように目立っている。これをアボガリオと呼ぶ）と湿地からなるフィンランド特有のテレインだが、3 つの種目に対応して、それぞれ微妙に違っていた。クラシックは比較的大きくて緩やかな丘を主体にテレインが構成されており、3 つのタイプの中では一番大ざっぱな地形と言える。リレーでは、小さい丘と湿地がモザイク上に入り交じっており、もっともテクニカルで難しいテレインである。またショートはその中間的な特徴を持つ。丘はリレーに比べると大きな単位からなり、その上面は、クラシックに比べれば微地形に富んでいる。丘の間には湿地があり可能度は悪いが、丘の上面の可能度は悪くない。

北欧の森というと一般には可能度Ａの美しい森というイメージがある。確かに地図のほとんどは白である。しかし、これは日本と北欧の通行可能度に対する考えに依存する部分が大きい。日本なら可能度 3 段階の表示でも確実に B にするだろうと思われる見通しの悪い森や、枝が気になってスピードが落ちやすい森でもほとんどが A にとってある。実際に走ってみると確かにその多くはスピードの低下が 20%以下だ。近年、このような基準の違いについてはワールドカップのマップをはじめ、だいぶ意識されるようになったが、まだまだ改善が必要である。

今年は天候が不順なせいもあり、天気は今ひとつぱっとしなかった。初日にいきなり大雨で印象を大いに悪くしたが、その後もトレーニングキャンプ中は一日中天候に恵まれるということはなく、曇り時々晴れ、一時大雨という天気が毎日続いた。来年世界選手権やその観戦レースに参加する予定の人は、雨や寒さに対する十分な準備が必要である。

デンマークナショナルチーム合宿に参加

この合宿は 3 週間にわたって行われているが、もちろん 3 週間参加する選手はいない。それぞれの都合に応じて 3 日から 1 週間程度滞在し、12 個所用意されたテレインを調整して走る。コースは基本的には 2 つのタイプで、延々1-2㎞の長いレッグのコースか、1㎞あたり 5 つ程度のコントロールピッキングである。またその両方の切り替えを要求されるコースや、レースのスピードでのオリエンテーリングを練習するテストコースがいくつか用意されていた。このテストコースには E カードのユニットが設置されているので、ラップをとることができる。そして、それまでに走った人とラップを比較することができるようになっている。

僕と落合志保子が滞在した 4 日間はちょうどジュニアチームが来ている時だった。あまりコミュニケーションをとった訳ではないが、森の中での走りを見ていると、デンマークでもこんなもんかという感じだった。実際テストレースの結果なども、シニアのトップが来ていないので、ほぼ同格だ。逆に言えば、彼らはその状態から努力して強くなっていくのだろう。

毎日午前、午後と 2 回練習にでかける。森にいる時間はそれぞれ 1 時間半くらいで、昼は食事と昼寝？で十分時間が取られている。さすがに 3 日目には疲れがでたが、練習量的にも十分つきあえる程度の内容だった。

北欧以外を出身とする選手の中には、強くなるために北欧で勉強したり仕事をする選手がいる。実際世界選手権の上位で活躍する非北欧の選手のほとんどは、実際には北欧に住んでいる選手なのである。北欧への移住は誰にでもできる訳ではない。しかし、このように適当な実力を持ったチームやクラブの合宿に参加させてもらうことはできる。そこでは、大会に参加しているだけではなかなか得られない情報や経験をすることができるのである。

ライプニッツ（オーストリア）へ

8 月 1 日にデンマークの合宿を離れて、オーストリアへ向かった。ウィーンの友人に 13 年ぶりで再会して旧交を暖めた後、ライプニッツ（同じくオーストリアでウィーンから電車で 3 時間）に向かった。IOF（国際オリエンテーリング連盟）に参加するためである。IOF の総会は 2 年に一度開かれており、今回で 20 回目を数える。1980 年代までは日本も参加していたが、その後およそ 10 年のブランクがあって、1996 年から再び参加するようになった。

1996 年は僕一人、そして前回は世界選手権招致を表明する愛知からの落合君の二人であった。今年は世界選手権の正式表明およびロビーイング、決定のための投票ということで、JOA からも 5 名の代表（鈴木専務理事、中島理事、青木理事、古賀事務局長、村越）、世界

選手権の運営者となる愛知より 4 人（落合、新帯、小山、金井塚）、また日本への各種国際会議招致を援助している JNTO（ヘレウッド氏）と世界選手権を協賛する愛知万博（春本氏）より一人づつ、また応援団として併設されるパークOに参加する 3 人（落合志保子、西尾（京大）、古澤（広大）という、合計 14 人という一大代表団となった。

総会までの招致活動の道のり

総会での招致活動と投票の話をするのに、そこまでにいたる経緯の説明は欠かせない。2 年前に招致の意志を表明した時には、対抗馬の気配はなかったが、昨年の秋になってスウェーデンが、また冬にはハンガリーが立候補してきた。スウェーデンは言うまでもなくオリエンテーリングの発祥地、そして自他ともに認めるオリエンテーリング連盟の盟主である。またハンガリーは IOF の設立当初からの加盟国であり、すでに 83 年に世界選手権を開催、72 年と 91 年・95 年には世界チャンピオンを出しているオリエンテーリングの強国である。近年にない激しい開催地争いとなってしまった。

IOF はことあるごとに世界への普及を、そしてそのために世界選手権を様々な地域で開催する重要性を指摘する。日本もその思いに応えるべく、今までも何度か世界選手権開催の可能性を探ってきた。それがようやく今万博という好条件を得て可能になろうとしている。その今、IOF の盟主たるスウェーデンがなぜ日本に対抗して？総会当日の中島 JOA 副会長の演説にもあったように、愛知の落合氏をチーフとする招致チーム全体が割り切れない思いであった。スウェーデンなら技術的にも社会環境的にも安心して世界選手権を任せることができる。テレインの質も保証されている。しかもスウェーデンは、各国チームに対して無料の宿泊とスウェーデン内での移動を約束してきた。ただでさえ物価高で悪評の高い日本である。ワールドカップの時も誰もが、日本は物価が高いからなあと口にする。航空券の値段も 2 倍では済まない。日本での世界選手権を各国にとって経済的に負担の少ないものにし、魅力あるものにするための努力、それをアピールする活動がそれから始まった。

過去の開催国にロビー活動の実績を問い合わせたり、JNTO のアドバイスと協力によって各国のキーパーソンにコンタクトをとったり、万博とのタイアップやスポンサーの援助、教育委員会の協力による安い宿舎の確保などがそれである。招致委員長である落合氏や新帯氏をはじめとする愛知県協会の主要メンバーはそのために多くの時間を費やした。東京の上田氏、毎日新聞（トータス）の白戸氏の協力も仰ぎ、最高の条件をプレゼンテーションできるための準備が進められた。こうした熱意に動かされ、JOA もようやく重い腰を上げた。紆余曲折はあったが、なんといっても理事であり森永の副社長でもある中島氏がオーストリアに来て基調演説をしてくれると聞いた時には正直驚いた。

特筆すべきは金井塚君（京大）の活躍である。彼は自ら名乗り出て 7 月のほぼ一月をヨーロッパ各国のオリエンテーリング連盟の訪問にあてた。こうして、招致チームは、日本での世界選手権ができるだけ各国チームの負担にならないものであることをアピールするとともに、日本でオリエンテーリングを開催する意義を各国に浸透させることに努めた。いくつかの連盟は、日本で世界選手権を開催することの重要性を主張する招致チームの主張を聞いて即座に支持を表明してくれた。また支持はできない旨とする連盟からは、日本での世界選手権の弱点がどこにあるかを認識することができた。

現地での招致活動

オーストリアでも、PR のためのブースを設置し、それを見に来る各国の代表団に日本での世界選手権の意義を説明したり、日本文化の紹介をした。ワールドカップに参加した選手のコメントに始まり、日本文化の紹介やビデオ放映など、招致チームの新帯氏による、きめの細かいプレゼンテーションであった。また、ウィーンで日本料理店を開いている拝崎氏が、総会前日に開催されるティーブレークにおいて、寿司 100 人前を用意してくださった。このジャパン・アワーは非常に好意的に受け取られたようで、初めは食べるのをためらっていたスウェーデン招致チームも、その美味しさを賞賛したとか。これらの準備活動の詳しい内容は、いずれ落合氏等からのレポートがあるだろう。

ジャパンアワーで各国の代表者に訴える日本誘致団

遠征中のワールドカップで各国の選手のコメントを聞いていると、「理念的には日本での開催は大事だよね。でもスウェーデンは近いし（うちから車で２時間半だよ：ホーカン談）、メディアの取り上げ方も、スポンサーの付き方も違うし（それはセルフィッシュ・リーズンだけどね：ユハ談）」と言った反応がほとんどである。このころは正直ちょっと厳しいかなという気がしてきた。直接コングレスで投票にあたる各国連盟首脳の反応は概ね 3 つに分かれる。「理念は分かる。全くその通りだ。うちは日本を指示するよ」。非北欧のチーフを自覚するスイスはその典型である。また対抗勢力を自認するロシアもそうだった。IOF の理事を出しているポルトガルなどもこの部類である。オーストラリアやニュージーランド、アメリカ、カナダなども理念には賛同してくれる。彼らは非ヨーロッパの同士であるとか、実際に日本の方が渡航のコストが安いといった実利面でも日本での開催を支持してくれたものと思われる。カナダやニュージーランド、南ア等はもともと代表団を送る予定がなかったものを、招致チームのリクエストに応えて、併設のパークOに参加していた選手を代表団として認定し、日本に投票する手はずを整えてくれた。

もう一つの反応は「うちは金がない。日本に選手を送るのには多大な金がかかる。応援できない」とはっ

きりした否定である。これは旧東欧に多い。ことあるごとにこうした国々が苦労して世界選手権に参加しているものを見ている身としては、もちろん納得できる意見ではあるが。彼らに対しても、招致チームは根強い説得を行った。

意外に大国の態度が煮えきらない。イギリスも「いずれも考慮に値する提案だ。じっくり考えたい」と言うし、97 年に立候補を表明し、スウェーデンに決まることが不利になるはずのデンマークも「前日の夜決める」と言う。ある選手の話によれば、スウェーデンに投票せざるをえないが、本当は日本がなってくれるといいなと思っているとか。事あるごとにスウェーデンに反発するノルウェーも、当日のティーブレークで「意見が聞きたい」と連盟会長に詰問すると、「分かってくれ、北欧諸国は一緒にやっていかなければならないのだ」という。まず確実に日本支持をしてくれると思っていたこれら二つの国のこの発言には正直驚くとともに、政治の世界の奥深さをかいま見た思いだった。また近隣諸国ということで当然賛成に回ってくれると連絡を取り合っていた中国が、投票がある午後には観光に出かけてしまったのには唖然とした。

いよいよ総会

会議は 8 月 4 日の 9 時過ぎに始まった。開会後、開催地決定の投票にハンガリーを含めるかどうかの投票が行われた。ハンガリーが締め切り時に出した書類には多くの不備があり、正式な立候補としては却下されたのだが、そもそも立候補の書類送付が遅かったことにハンガリーのアピールがあり、立候補を受け付けるかどうかの決定が総会にゆだねられることになった。もしハンガリーが入れば東欧の票のいくつかはハンガリーに流れるだろう。実際ルーマニアは明かにハンガリーを支持していた。票が割れれば日本が有利になる（実は実際の投票は過半数を獲得するまで最下位を落として繰り返される方式だったので、この認識は誤りだったのだが）。ここはハンガリーの立候補受付に賛成票を投じる。この承認には 2/3 の票が必要なので、厳しいかなと思っていたのだが、26/36 で可決される。この投票の時、ニュージーランドのアリスタはわざわざ日本の席にやってきて、「ここは賛成がいいんだな」と念を押してくれた。

スプリント（パークO）の世界選手権を導入するかどうかで、午前中の議事は紛糾した。PWT のヤノスラ・カクマルチェクがかつての世界チャンピオンでありミスターオリエンテーリングと称されるヨルゲン・モルテンソンをゲストスピーカーとして呼ぶことを提案し、ヨルゲンは IOF の保守的な姿勢を批判するスピーチを行った。総会乗っ取りにも等しい、理事会のピンチである。会長スーはこのピンチをなんとか乗り切って会議は昼休みに入った。

休み時に、何度か副会長のヒュー・カメロン（オーストラリア）がやってきて、「投票の方法知っているか一度で決まらなければ、最下位を落として決戦だ」さらにその後、「さっきのに一つ訂正がある。一度目で過半数を取れば決まりだ」。彼は昨日の夜も「おい、知っているか、スウェーデンは世界選手権期間中の選手無料宿泊のバウチャーを配っている。見せておこうか？気をつけてくれ」。受験生を試験場に送り出す父親のように、彼はあれこれと気を遣ってくれた。

2 時から始まった会議は、今日のメイン・イベントを待ちかねるように議事が進行した。まだ長すぎると思っていた原稿のチェックを続けていたので、僕自身、この間の議事はほとんど憶えていない。いよいよ3時、3 国のプレゼンテーションの時間となった。直前の休憩の時、香港のベラがやってきて手を叩き合って励ましてくれた。「さっき世界選手権でやるって決まったスプリントを万博の会場でやるって言っちゃえ」とマーセルが言ってました、と金井塚が言ってきたので、それも原稿につっこんだ。プレゼンテーションの順番はくじ引きで決定された。慎重な配慮に、IOF 首脳がこの投票が微妙な結果になるものであると予測していることがうかがわれた。

日本は一番くじ。いよいよ本番という時に、パソコン接続のプロジェクターがうまく作動しない。議場にじりじりとした空気が流れた。「もう時間を計りはじめているの？」と、ジョーク気味に質問すると、スーがにこやかに「いいえ、まだよ」と応えたあと、プロジェクターを再調整しようとしていた IOF 委員のビョルン（スウェーデン）が「時間を引き延ばそうとしているのさ」とジョークを飛ばし、会場の緊張がほどけた。しかし、これ以上待てないと判断し、プロジェクターなしではじめようとした時、副会長のエドモンドが、「5 分休憩しよう」と提案をしてくれた。「日本を支持している」と言えない誰もが、日本を支持してくれていたのだ。

休憩後のプレゼンテーション。僕が司会をし、まず JOA 理事（森永副社長）である中島さんの挨拶、そして万博協会の代表である春本さんが挨拶をした。与えられた時間は 10 分。きっちり測るよ、と言われていた。ここまでで 4 分から 4 分半で、僕が後半の詳細な話をする手はずになっていた。ところが中島さんが終わった時にすでに 4 分以上。うわっ！という感じだった。春本さんが挨拶している間に、中島さんの内容とだぶったところを省いて、2 分くらい縮まる修正をして話を始める。8 分 45 秒位で通過しなければいけない部分を 9 分で通過。厳しいと思いながら少しづつ表現を縮めて対処する。9 分 40 秒を過ぎて、全部はいい切れない／結論がスカスカな表現になるのは嫌だという葛藤があったが、結論に入っていれば 10 秒くらいは見逃してもらえるだろうと判断し、少し早口にしゃべる。そして 10 分ちょうどの時点では、明かにもう 1 センテンスで終わるという状態にできた。

結果は 10 分 12 秒。まずは及第点であろう。英文をチェックしてくれてその長さが分かっていたJNTOのヘレウッド氏は、やきもきしていたようだが、終わって脇を通る時、「ぴったり！どうしてできたの！？」と声をかけてくれた。反応は悪くなかった。

2 番手のハンガリーのプレゼンテーションは誰がみても熱意に欠けており、いかにも聴衆の箸休めという感じであった。コンセプトは悪くないのにもったいない。スウェーデンのプレゼンテーションは流暢ではあったが、戦略的には明かに失敗であったと思う。選手団への無料の宿泊を約束するバウチャー（もちろんシンボル的なものでしかない）をひらひらさせ、スポーツに熱心なヴェステロースの市長が決定を待ちわびているので電話があったと携帯電話を鳴らしてみたり、最後にピクルスを配ったり、エンターテイメントではあったが、それ以上のものではなかった。もし、彼らが「多くの選手を世界選手権に参加させることこそ真の発展の道であり五輪への近道」と、真っ向から勝負

してきたらとても勝ち目はなかっただろう。

3 国のプレゼンが終わり、さっそく投票に入る。総会のこの場でも迷っている連盟がある。隣のラトビア連盟会長も投票用紙を手にしたまま迷っている。「日本には興味はある。でも遠いし、私たちの連盟の予算は年間 7000 ドルしかない。これで国内選手権も含めて何から何までやらなければならないのよ」と言っていた彼女である。

票が集められ立会人によって数えられる。たった 37 票を数えるのにこんなに時間がかかるのかと思うほどの時間かかっている。隣にいた青木氏が、「おいおい随分一つのところに集まっているな」と言っている。勝てるかもしれない。そう思った。一つの国に地滑り的に票が集まるとしたら、それは日本以外にはありえない。

投票結果を受け取ったスーが口を切った。「時間がかかったから、皆さんは何かが起こったと思っていることでしょう。結果、Sweden nine, Japan nineteen, Hungary nine」手元の紙にはちゃんと 9, 19, 9 とメモしてあるのに、僕はこの数字を見ながら日本が 18 票だと思い続けていた。ふーん、ぴったり半数か、じゃあ決戦なのかと。後に続いたスーの「開催は日本に決定」という台詞を聞いても、「ふーん、過半数っていうのはちょうど半数も入るのかな。偶数だからかな」なんて、馬鹿なことを考えていた。他の日本人が歓声を上げ、議場が拍手に包まれいるのを見て、思わず右手でガッツポーズを取ってしまった。当選してもこれだけはやめようと思っていたのに。もちろん真っ先に落合氏のところにいき、拍手をし、隣にいた金井塚君と抱き合って喜びあった。招致チームの活動、とりわけこの一月の彼らの活動がなければこの決定はなかっただろう。どんな 1 ステップ手を抜いただけでも日本が破れていた可能性を、票数は示していた。

決定の喜び、そしてこれから…

決定の挨拶をした。「私たちは今喜びにあふれている。しかし、これは結婚式のようなものだ。私たちはこの感動を胸に、これからの時にはハードな仕事をしていく。そして 5 年後の素晴らしい大会を約束する」ヨーロッパ人にはこのように結婚生活を揶揄する習慣がないのか、議場も感動に包まれていたのか、このジョークは全然受けなかった。ともかくも招致した愛知にとっても、そして日本のオリエンテーリングにとっても責任の重い 5 年間が始まった。

様々な人が祝福してくれた。ヒューは静かに手をにぎって、「これがオリエンテーリングのためにいいことなんだ」と言った。パーク O の会場では、ビョルナーとなぜかオーディンが握手を求めてきた。デンマークのドルテ・ダールも「良かった。サッカーみたいにならなくて。大国だから、重要人物がいるから勝つっていうのはおかしいわ」と言ってくれた。責任をひしひしと感じているというと、「それはあしたから、今日のバンケットは思い切り楽しんで！」と言われた。対抗馬ハンガリーの会長がやってきて、「何かできることがあったらいつでも言ってくれ。私たちには多くの経験がある」と、20 分以上もしゃべりこんでいった。

さんざん迷っていたラトビア会長のジャネッタが感動の面持ちでやってきた。「日本って、思ってるほど遠くないのよね。きっと。日本に行けることを楽しみにしているわ。」彼女は迷った末日本に投票したに違いない。「昨日のお寿司はおいしかったわ。リガ（ラトビアの首都）に寿司レストランがあるの。今度そこにいくときにはきっとあなたのことを思い出すわ」。日本に投票したら、選手を送るのにどれほど苦労するかしれない。ひょっとすると送れないかもしれない。そう思いながらも地滑り的に日本の提示する理念に共感してしまった連盟は決してラトビアだけではないはずだ（今でも現役の選手である自分としては、こういう「無責任さ」には複雑な思いだが）。そういう連盟の参加を助け、少しでも多くの選手を参加させることができてこそ、本当の世界選手権の成功はある。近年 spectator friendly（観客が見て面白い）media friendly（メディア受けする）オリエンテーリングへの変化が強調されているが、根底には competitor friendliness（参加者に志向した）がなければならない。これはハンガリーが主張する Keeping tradition and looking for the change の思想でもある。その意味でこの投票に敗者はいない。スウェーデンの主張もハンガリーの主張も日本の世界選手権に生き続けていくのだ。

この 5 年間、ジャネッタと一緒にとった写真を机に飾っておこうと思う。WOC2005 の成功には、このような連盟の選手たちの参加が不可欠のものであることを、その写真は思い出させてくれるだろう。

ライバルの
スウェーデン誘致団と
お寿司を囲んで記念撮影